勤勉で働き者のいる中米の日本　エルサルバドル

私は短期専門家として３度エルサルバドルに向かうことになった。１回の滞在期間は約一か月。その後、カウンターパートの３度の本邦研修の受け入れなどを通じて、10 年以上を経た今でも繋がりがある。失礼ながら、派遣要請を受けるまでエルサルバドルについての知識は皆無。公用語はスペイン語。場所は中米、広さは北海道の４分の１。赤道に近く暑いなど、とぎれとぎれの情報をつなぎながら支度をして飛行機に。内戦終結から 10 年ほどと聞いて治安が少し気になった。「日本と比べれば良くない」「夜は一人で出歩かない」「移動はホテルで正規のタクシーを頼む」など、少しの注意と助言を受けて過ごすことになった。幸いにも３度の滞在中、不便に感ずることや危険と感じたことはなかった。

ｻﾎﾟﾃｨﾀﾝ農家：ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ奨励の網室

ﾗ･ｳﾆｵﾝ地区の傾斜地ﾄﾏﾄ栽培

自然条件を生かした農業生産と農家のつながり

国土が狭く人口の多いエルサルバドルの農業は、小規模零細な農家が担っている。2～3 ﾏﾝｻｰﾅ（1.4～2.1ha）程度で 1940 年代の日本に近い。殆どが自給的農業で生活も厳しく、それを豊かにすることが JICA プロジェクトの目標であった。

野菜生産の最大の敵はウィルスを媒介する害虫である。特に、苗の時に罹患すれば、収穫は著しく減少する。このためプロジェクトでは、網室での育苗を奨励していた。提供された網室を設置した農家は、近隣農家に無償で配布する苗を生産してくれた。繋がりを大切にしているのである。日本の良き時代の農村を思い起こす一つでもあった。

また、作物の多くが急傾斜地で栽培されている。作業機など入る余地もなく、殆どか手作業によって行われる。一方、その傾斜地栽培は、土壌内の水切れがよく、トマトなどの野菜は、高糖度で良質なものが生産される。湿潤な環境で行われている日本での作物栽培を振り返る起点にもなっ

た。自然条件を巧みに活用した作物生産は、農薬使用量を極端に減少させる安心安全な食料生産の基礎となっている。

コーヒーとマンゴー

エルサルの特産品にコーヒーがあるが日本ではあまり知られていない。良質なものが生産され、日本のコーヒーチェーンも輸入している。特に海抜の高い農園で生産されるものは質が良い。訪問した農園の一つは、数百ヘクタールの農園で、農園内にツリーハウスのコーヒーショップがあった。帰国時の一つのバックは、いつもコーヒーが入ることになった。

コーヒー農園

農園内にﾂﾘｰﾊｳｽのｺｰﾋｰｼｮｯﾌﾟ

マンゴーの木：コフテペケ農家

もう一つ忘れてならないのは、マンゴーである。乾期になるマンゴーは美味。

農家の庭先には、２～３本の木があるが木ごとに味が違う。まずはどれが美味しいのか確認してから頂いたものである。また、エルサルは火山国で起伏が激しい尾根に道路が通っている。車中から眺めるのも結構楽しいと感じた。

エルサルの観光

３回の訪問で、仕事とその間を利用してエルサル全土に出向くことができた。それは真面目で勤勉なエルサルの人々のおかげであり感謝している。皆、素朴で気さく。時間を守り、伝えたことは一生懸命に取り組む人々で、日本人よりまじめなのではと感じた。観光地は、カルデラ湖を望む丘や滝の流れるところもある。民芸品店もあり、おみやげに事欠かない。

フアユアの滝

コフテペケ湖

　エルサルバドルでの業務は、勤勉なカウンターパートに支えられて大過なく終えた。一方で、私自身の仕事の進め方に大きな影響を与えた。それは、与えられた自然条件とどう向き合い、その中で安全安心な食料を生産していくには何が必要か。さらには、日本の技術がいずれの国でも無条件に成立するわけではなく、この地域に与えられた条件を最大限に生かしつつ、提供する技術を組み立てるということである。エルサルへの派遣後、複数の国からの本邦研修や派遣にも携わらせて頂いているが、そのことを肝に銘じながら仕事をさせて頂いている。エルサルには大きな感謝しかない。

渡邉　和義（わたなべ　かずよし）氏
2001～03 年にＪＩＣＡプロジェクトに農業普及と経営の短期専門家として３度エルサルを訪問。同時期、プロジェクトの本邦研修を３年に渡って受託。その後ブラジル、モンゴルの本邦研修受託。モンゴル普及システム確立プロジェクトへ短期専門家として３度派遣。道職員退職後は、農業経営コンサルタントの傍ら、北海道農業協同組合学校非常勤講師等を勤める。